

建築と女性性

青山学院大学
総合文化政策学部教授
黒石いずみ
Izumi Kuroishi



近年は日本でも女子大学の建築系学科だけでなく大学の工学部建築学科で学ぶ女性の数が大幅に増加し、毎年多数の女性の建築家や建築業に携わる専門家が輩出されています。世界で活躍する女性も増え、建築と女性の関係についての考えが大きく変化したと感じます。女性の能力が男性に比べてどうかという議論はすでに過去のものですが、社会の仕組みとのギャップはまだ存在し、女性たちはそのポテンシャルを活かしきれいていません。建築の世界でも女性の特徴を活かすことで、その社会基盤づくりの役割と魅力を新たに展開することができるとはなんでしょうか。そこで今回は建築における女性

性すなわち生物学的な意味でというより社会的な意味での「女性」のイメージについての歴史と、今後の建築の考え方や生産のあり方の転換の可能性について、自分が経験してきたいくつかの事例を交えてお話しします。

建築史では女性性をどのように扱ってきたのでしょうか。十九世紀までの古典的建築論では、柱頭の装飾を悲劇の恋で亡くなった少女の物語や女性の巻き毛、衣服のひだになぞらえるなど、ロマンチックな美意識に女性性が表れます。女性の身体の曲線や柔らかさとか弱さ・軽やかさを、インテリアの優位性や極限まで構造の造形性を追求するオール・ヌーボーの精神は、現代

ました。住宅設計が女性建築家の主な仕事の場合となったのはこの影響もあると思います。歴史を見ると、建築における女性性のあり方がその社会的役割と権利、家庭という概念の変化に従って変化し、政治に裏付けられて具体的形態や空間として生み出されてきたのがわかります。女性性は、普通の建築に対する社会のイメージの変化を反映することがわかります。

私は設計事務所での修業後、アメリカの大学院で学びましたが、多くの方のお陰で女性としての困難もなんとか乗り越えてきましたので、あまりそれをポジティブに捉えることはありませんでした。建築やインフラと女性性の関係が重要だと思うようになったのは、二〇一一年の東日本大震災後に「遠縁近縁プロジェクト」と名付けた被災地の郷土食保存の活動をした時です。一〇カ所の仮設住宅を訪問し、女性や東京の学生たちと一緒に昼食会を開催しました。その時、被災地の女性がそれぞれとても創意工夫とリーダーシップに富んでいることに驚き、復興はこの女性たちの力を生かすべきだと思いました。しかしその誰もが、男性社会のルールを尊重し自分自身が表に出ることを避けていることに気づきました。使い手・守り手としての女性の能力とリーダーシップ、役割は、日本の伝統的社会を支える根源的な力なのに表に出て来ないの

です。都会から行った私たちには、その地域社会の仕組みがなかなか理解できませんでした。女性性というのは地域と文化で多様であって、母性と父性の相互補完関係を柔軟に考えることが必要だが、危機の時にはその重要性は明らかだと思いました。

現在、建築家やデザイナーなど作り手と市民をつなぐ仕事に携わる人を育てていますが、それは自分の建築家としての経験から、専門家と使い手の間の対話が不足していると感じていたからです。建築における女性性の位置付けの歴史は、この専門家と市民の間の対話の不足を象徴していると思います。実は女性は単なる消費者ではなく市民として生活の場を運営し、文化や次世代を育てる立場なのに、その視点が不足していました。それは、建築の生産ではクライアントや市民がその主体であり、建設後にそれを維持して守り、地域社会の基礎として育てる役割があるという視点が、作り手にも使い手にも不足していたことにつながります。

恐らくそれを乗り越える手掛かりは、食べ物と一緒に作る作業やものづくりで知る、共同作業や持続的な努力、共感を感じる日常的な経験にあるのではないかと思います。私自身、現場の設計監理をしていた時のコンクリートの打設工事や大工さんたちとの経験で、建築を大事に

作ることの魅力を知りました。コンクリートの打設の時は、あらゆる職種の人々が一齐に型枠をハンマーで叩いて、少しでも美しいコンクリートができるように心を合わせて何時間も動きました。その時の真剣で忍耐強い共同作業は誰に指示されたものでもなく、ものづくりへの皆の思いによるものでした。性能の基準やクライアントの要求、役割の明確化によって効率よく作業するだけではなく、良い建物を社会のために残していこうとする作り手の思いが、その生産の質を豊かにし使い手に伝わっていくと感じました。

現代は都市と地域のギャップが広がり、少子高齢化が進むと同時に多様な世界の文化や価値観との共存が求められています。経済的な発展が明確な人生の目的とならない社会で人々は一〇〇年を生きる時代に入りました。小さいものや弱いもの、異質なものや差別されるものへの眼差し、様々な能力が相互に補いあうことが必要になりますし、これまでの日本の近代化と経済成長を牽引してきた仕組みや価値観が変わらなくてはいけないと言われています。社会基盤としてより良いものづくりや生活環境づくりをするために、建築やインフラづくりに元来備わる女性性を多面的に活かしていくべき時代に入っていると思います。